

山口瑞鳳博士のチベット語文語文法三部作

袴 谷 憲 昭

チベット学の世界的権威である山口瑞鳳博士の『要訣チベット語文語文典』が最近刊行となり（奥付は二〇〇三年一月二十八日とあるが、私が発行所の大本山成田山新勝寺成田山仏教研究所を介して拝受したのは同年四月二十三日のことであるから、その間に印刷等のなんらかの事情による遅れがあったかもしれないにせよ、極最近の刊行であることは間違いない）、山口博士御自身がおっしゃっておられるわけではないが、これによって同博士のチベット語文語文法に関する永年の御成果である「三部作」が見事な形で完成したと私には思われるのである。まずは、その「三部作」を刊行順に左に掲げさせて頂きたい。

A…『チベット語文語文法』（春秋社、一九九八年四月）
B…『概説』チベット語文語文典』（春秋社、二〇〇二年二月）
C…『要訣チベット語文語文典』（大本山成田山新勝寺成田山仏教研究所、二〇〇三年一月）

右「三部作」中のA書とC書については、後者の中で著作御自身が次のように述べておられる。

チベットには、われわれの期待するような、チベット語を学問的な対象とした文法書はかつて成立したことがなかったのである。

駒澤短期大學佛敎論集第九號 二〇〇三年十月

山口瑞鳳博士のチベット語文語文法三部作（袴谷）

の参考に供することを願って改めて『要訣チベット語文語文典』（即ちC書）を著わした。ただ、これも初めてチベット語を学ぶ人の便宜に沿うとはいえないので、別にここでみられるように略説した『概説チベット語文語文典』（即ちB書）を準備した。

〔中略〕本文典（即ちB書）で主張される諸規定については、原則としてそれらの成立理由を出典と共に詳細に説明しなかった。これらを確かめたい場合は上掲の拙論『要訣チベット語文語文典』を参照して頂きたい。（B書、一頁）

以上によって、著者の「三部作」に対する執筆の意図には誠に明確なものがあったことが分かるであろう。A書は、チベット語文語の文法構造を学問的に解明すべくチベット語の歴史的な用例に基づいて論述されたもの、B書は、チベット語の文章構造を体系的に分析して「二表現位相構造」の観点から初学者の便宜に沿うよう略説されたもの、C書は、B書と同じ目的のもとに、専門的にチベット語文献を読む人の参考に堪えうるよう詳述されたものである。蓋し、著者は、同じ目的をもったB書とC書の執筆を並行して進められたか、あるいは、前引のように、印刷出版の順序とは関係なく、まずC書を終えられてからB書を執筆されたが、より専門的なC書には推敲や印刷出版に絡む様々な状況から困難も生じて、実際の刊行順は、却ってC書の方がB書よりも一年ほど遅れてしまった、というような事情があったのかもしれない。しかし、かかる事情があるいはあったにせよ、それは「三部作」の完結にとって本質的なことではない。本書評は、その完結を喜び、その意義を広く天下に紹介できたらと願うだけの気持からなされるものである。

しかし、私は今、「書評」と書き出しながら、その実を「紹介」と

著者はこのような視点から、チベット語文語文法の構造を学問的に解明することを願い、先頃チベット語の歴史的な用例に基づいて、問題点を発掘する試論として『チベット語文語文法（一九九八 春秋社（即ちA書））を著した。ただ、様々な批判に接して、総合的にチベット語を検討しようとした意図にもかかわらず、広く江湖の声を聞くことは出来なかった。そこで、やむなく多年自ら培ってきたいくつかの問題意識に即して考究を重ね、本書に述べるような文章構造の分析と総合を果たし、二表現位相構造の理念に到達した。この趣旨を、専門的にチベット語文献を読む人の参考にも供することも願って、改めてこの『要訣チベット語文語文典』（即ちC書）を著わした。（C書、一頁）

しかるに、右のC書中に言及のないB書については、却って実際の刊行順からいえば二番目となるB書において、B書自体のことは勿論のこと、それがA書とまだ未刊のはずのC書との比較のもとに次のように述べられている。

その（A書の）内容はチベット語を学ぶ便宜に備えたものではなかったため、チベット語の文章構造を体系的に分析して明らかにすることはなかった。そこで専門的にチベット語文語文典を読む人

二〇九

二一〇

してしまったことに内心忸怩たるものを感じている。というのも、「書評」とは「批判」でなければならぬということをもつて教えて下された恩師こそ山口瑞鳳先生にはかならぬに、「紹介」でお茶を濁してしまったのでは、恩師を笠に着て師の教えを裏切るという、先生の一番嫌がることをやりかねないからである。単なる「紹介」ならやらない方がよい、というお声は今にも聞こえてきそうな気がするものであり、先生の本当に期待されていることが真の「書評」であることは間違いない。しかるに、先生が満を持して刊行された高度に学問的なA書に対しても、前引のC書中で先生御自身が触れられているように、先生の望まれるような学界の反応はなかったようである。思うに、先生と拮抗しあるいはそれを凌駕した立場から「批判」的に「書評」をなしうるチベット文法学者は現在求むべくもないということかもしれないが、他方で、A書刊行からはほぼ五年、最近のB書からでも一年余を経ているというのに、極普通の所謂「紹介」すら、管見の及ぶ限り、なされていないのではないかとこのことが若干私の気に掛るようになってきた。だからといって、私の「紹介」であってよいという弁解には少しもならないのだが、チベット語は、私が世界的な文法学者から教わった唯一の語学であるという理由だけで、その語学に関する高度に学術的な「三部作」を、初学者向けのより一般的なB書を中心に、広く江湖に「紹介」せんとのみ意図したものが本書評であることをお断りして、学問に厳しい先生と識者の御海容を予め乞う次第である。

私事にわたって恐縮であるが、私が先生から初めてチベット語の手解きを受けたのは、一九六六年の修士一年の時、現今の学究からみれば恐らくかなり遅い。確か、先生は、一九六四年秋にはほぼ

七年間のフランス留学を終えられて御帰国、その翌年の四月より東京大学文学部の講師としてチベット語を教えられ、我々はその二年目に当る学生だということは当時から知っていたような気がする。他の人はいざ知らず、私は不肖の弟子とは私のことを言うのだから、くらいに常々思っているが、そのチベット語には試験がなく、動詞の分類をレポートとして提出するように言われたことを妙に覚えている。私はそのレポートさえ出さずに単位を頂いたような気がするのだが、動詞の分類がいかに重要で、それが先生のチベット語文法論の中でいかなる位置を占めていたかは、その後やっとなを追うことに次第に強く意識するようになった、というくらいに私は出来の悪い学生だったのである。しかし、先生は、まだ教科書もなかったせいもあるかもしれないが、文法そのものの説明にはあまり時間を費やさず、後期には実際にチベット語の読話を読み始めておられたような気がする。それが出来の悪い私の好みには合っていたと言えるのかもしれないのであるが、しかし、こちらとしてはチベット語云々というレベルの話ではなくて、フランス帰りの自由で批判的な格好のよい先生にこちらが勝手に私淑していたというのが実情であつたろう。しかるに、教科書の方は、私が博士課程に進んだ年の一九六九年の夏に、東洋文庫でユネスコ・東アジアセンター主催のチベット語講習会が行われた際に、山口瑞鳳先生が著された『チベット語文法教科書』が参加者に配布され、この教科書、およびこれに先生御自身が毎年のように加筆訂正を施された改訂版が、先生の各大学での御講義を介し、コピーで次第に世に流布するようになっていったのである。因みに、その一九六九年夏のチベット語講習会は、前半の口語と後半の文語とに分かれ、前者は北村甫先生、

山口瑞鳳博士のチベット語文法三部作(袴谷)

二二一

後者は山口先生が担当されておられたが、勿論私は両方出るつもりではあったものの、口語は更に出来の悪い学生であった私はそのコース半ばにして欠席がちとなり、結局は山口先生の方だけで終わった。しかし、ここでは、こんな惨めな私事が書きたいわけではない。先生御自身が認めておられる(A書、4頁、B書、二五四頁参照。後者では、その年が一九六七年になるように記されているが、なんらかの勘違いが私の方にあるのかもしれない。)ように、この教科書こそ、今回の「三部作」の基となったものであるということをごここに特筆大書しておきたいだけなのである。

さて、チベット語文語を初めてしかも本格的に学ぼうとする方には、「三部作」中の、まずはB書を購入することをお勧めしたい。もともと昔できの悪い学生だったと自認している者がいくら勧めたところであまり説得性をもたないかもしれないが、それが長じて曲りなりにもチベット語を習得しえたのは山口先生のお蔭であることが間違いないとすれば、その先生の近時の見事な御成果につき、もしその「三部作」のB書だけでも往時にありせばと羨望の念を禁じえない者の推挙も一種の強い説得にはなりうると思う。その観点から以下には、B書を中心に据えて「三部作」を簡潔に「紹介」することにしたい。「三部作」のそれぞれの構成には微妙な違いはあるが、基本的な構成は「三部作」に共通しているといえる。最も大きな違いは、A書が文法構造、B書とC書とが文章構造の解明を主眼としているのを反映して、A書にはない文章論が、B書とC書とでは、第五章として加えられている点である。その点を、まず指摘した上で、次に、B書の目次を中心に、「三部作」の構成をみてみることにしたいと思うが、その前に、「三部作」に共通する最も基本的な大枠

山口瑞鳳博士のチベット語文法三部作(袴谷)

二二二

の構成を示しておけば、その文法記述は、まず大きく「詞」と「辞」とに分かたれ、前者が更に「体言」と「用言」とに区分されているということである。以上の「詞」「体言」「用言」、および「辞」とについては、日本語を母国語とし、日本語文法をある程度学校教育において習っているものには特に説明を要しないかもしれないが、B書では、その一いちが、「詞」と「体言」については二八頁で、「用言」については五八頁で、「辞」については一四六頁で、的確に説明されているので、参照されたい。一方、かかる日本語文法における術語がチベット語の文法記述中に採用されていること自体が「チベット語は、印欧語と全く異なった基本的な言語構造に立つて運用されているから、この点を意識して学習しなければならない。」(B書、xviii頁)とする著者の立場の表明にはかならないことをよく心に留めておく必要がある。以下、B書の「目次」に従って、細分は割愛し、章、節、項までを掲げれば次のとおりである(項中の○は省略空欄とし、チベット文字はワイリー方式によるローマ字表記とした)。

第一章 文字と正書法

第一節 文字の構成

第一項 三十文字と母音記号

第二項 梵語転写用文字と文字音価表

第二節 正書法

第一項 構字法

第二項 字句の区切り

第二章 詞 体言

第一節 名詞

第一項 名詞の形態

第二項 熟語・尊敬語と複数接尾辞

第二節 数詞

第一項 基数

第二項 序数と倍数、分数表現

第三項 各種数表現と単位名

第三節 代名詞

第一項 人称代名詞

第二項 指示代名詞と指示代名形容詞

第三項 疑問代名詞と疑問代名形容詞

第四項 不定代名詞

第四節 体言の用法

第一項 文の主格

第二項 文の補語としての用法

第三章 詞 用言

第一節 形容詞

第一項 形容詞の種類と形態

第二項 形容詞の二用法

第三項 形容詞の比較級表現と最上級表現

第二節 副詞

第一項 一般副詞

第二項 接続副詞と再説副詞

第三項 疑問副詞・不定副詞・仮定副詞

第四項 関係副詞

第三節 動詞 I 自動詞

- 第一項 自動詞の種類
- 第二項 自動詞による二重主格用法と補述文
- 第四節 動詞II 他動詞
 - 第一項 受動態的他動詞
 - 第二項 能動態的他動詞
 - 第三項 他動詞による二重主格と補述文
- 第五節 動詞III 敬語法
 - 第一項 動詞の敬語表現
 - 第二項 動詞・助動詞の丁寧表現
- 第六節 動詞と表現位相
 - 第一項 表現主体位相の叙述になる動詞の用法
 - 第二項 対象的位相の表現
- 第七節 助動詞I 表現主体位相
 - 第一項 繫辞的表現を確認する助動詞
 - 第二項 存在表現を確認する助動詞
- 第八節 助動詞II 位相転換
 - 第一項 助動詞'dugと表現位相
 - 第二項 時制補完の助動詞の用法
 - 第三項 対象的表現の繫辞 red
- 第九節 助動詞III 時制補完表現
 - 第一項 表現主体位相の時制補完表現
 - 第二項 対象的位相の時制補完表現
- 第十節 助動詞IV 使役法
 - 第一項 一般的使役法と自己使役法

山口瑞鳳博士のチベット語文語文法(三部作)(袴谷)

- 第四節 辞
 - 第一項 難易の表現
 - 第六項 適・不適の表現
 - 第七項 許可の表現
 - 第八項 請願の表現
 - 第九項 願望の表現
 - 第十項 疑惑を示す表現
 - 第十一項 蓋然性表現とその否定形
 - 第十二項 伝聞を示す表現
 - 第十三項 禁止、勧告の表現
- 第二節 表現位相と仮説法
 - 第一項 表現主体位相の叙述と対象的位相の表現
 - 第二項 仮説法構文と叙述の代弁
- 辞書および文法書

右の「目次」からの引用中、最後の「辞書および文法書」は、初学者を意識したB書のみに見られるのであるが、簡潔なものながら、極めて有益な指示なので、初学者はまずこれに従ってH.A. Jaschke(B書、一四八頁に)Jaschkeとあるのは誤植に始まる基本的な参考書を逐次用意すべきであろう。

さて、B書の「目次」に従って大略を示した右のような綱目こそ、印欧語とは全く異なった言語構造として山口瑞鳳博士によって把握されたチベット語独自の文法体系の基本をなすものにはかならない。従って、この整然とした体系は、文章構造の解明を重視したB書とC書とで加えられた第五章を別とすれば、基本的に一貫したものである。

しかるに、B書とC書とが文章構造の解明を重視した結果、当然

- 第一節 格助辞
 - 第一項 属格助辞 brel sgra
 - 第二項 具格助辞 byed sgra
 - 第三項 於格助辞 la sgra
 - 第四項 従格助辞 byung khungs
 - 第五項 強調助辞 ni sgraと感嘆詞
- 第二節 接続助辞と特殊助辞
 - 第一項 再接続助辞 ryan sdud
 - 第二項 連動接続助辞 cing/zhing/shing
 - 第三項 引用と言及の助辞
 - 第四項 勸令助辞と不定助辞
- 第三節 接続辞
 - 第一項 未完接続辞 lhag bcas
 - 第二項 結合接続辞 dang sgra
 - 第三項 選択接続辞'amと疑問形
- 第四節 接尾辞と否定辞
 - 第一項 終辞 rdzogs tshig
 - 第二項 接尾辞 mtha' tshig
 - 第三項 否定辞 d'ag sgra

第五章 文

- 第一節 各種の表現
 - 第一項 経験の表現
 - 第二項 推量表現
 - 第三項 必要・義務の表現と要請表現
 - 第四項 可能の表現

A書でも強く意識されていないながら背後にまわされていたものが、明確に前に押し出されることになった。それが、山口博士の独創ともいふべき「二表現位相構造」と称されているものである。この観点による記述はB書とC書の上に自ずと明瞭に現われているのであるが、特にB書では、初学者向けということが意識されて、その「序論」は「チベット語文法理解のために」と題された上で全文がこの「二表現位相構造」の説明に当てられている(xxi-xxviii頁)。その説明は、チベット語の文章論であるにもかかわらず、例文にチベット語を用いることなく、よく似た日本語の例文をそれに代用させて、まず初学者にこの「二表現位相構造」を理解してもらいたいとの熱意に溢れた文章で、しかもこれ以上は凝縮できないという形で与えられているので、直接これを読んで頂くのが一番よいと考える。しかし、敢えて、その要点だけを示す危険を犯せば、次のようになる。「二表現位相」とは「表現主体位相」と「対象的位相」とを指すが、「表現主体」とは「話し手」もしくは「書き手」のことであり、たとえ第二人称であれ第三人称であれ、その「表現主体」が現に感知している人や物が、全て「表現主体」の認定、判断、推測の範囲内にある他者として主観的に叙述されるのが「表現主体位相」であるのに対して、他の表現主体による叙述の伝聞も含めて事象が客観的な状態や動作として対象的に記述されるのが「対象的位相」である。しかも、山口博士によれば、チベット語においては、この「二表現位相」以外で表現されるものはないとされるので、要は、この「二表現位相」を正確に理解すること、その間で生じる位相の交替を明確に把握することが、チベット語の文章構造の解明の内容をなすことになる。このことが、B書「序論」では圧縮された形で示

されているので、この点をまずしっかりと頭に収めた上で、「三部作」に共通の第二章第四節以下の記述を実際のチベット文例と共に確認していくのがよいと思う。なお、「二表現位相構造」については、別途、山口瑞鳳博士が、「二表現位相と仮説法——チベット語の基本的構造——」『成田山仏教研究所紀要』第二五号（二〇〇二年二月）、一五六頁（横）として論じてもらっているので参照されたい。

ところで、「三部作」の基本的な大枠の構成はほぼ共通しているところに述べたが、その大枠にも、右の「二表現位相構造」の位置づけが微妙な影響を与えている。従って、ここに著者の苦心が集中的に現われていると見ることもできるのであるが、次にはそのことを示すために、先に掲げたB書の「目次」の第三章第六節より第十節までの箇所を担当する、A書とC書とのそれ（同じく細分は割愛す）を掲げれば、次のとおりである。

A書第六節 助動詞I 助動詞的補完表現

第一項 助動詞的表現

第二項 助動詞による動詞の補完表現

第三項 各種の表現——表現主体位相の叙述

第七節 助動詞II 助動詞と表現位相

第一項 繫辞的表現を確認する助動詞

第二項 存在表現を確認する助動詞

第三項 動詞²⁰と表現主体位相の転換

第四項 助動詞²⁰の使用

C書第六節 動詞IV 表現位相

第七節 助動詞I 表現主体位相

第一項 繫辞的表現を確認する助動詞

山口瑞鳳博士のチベット語文語文法「三部作」(袴谷)

が、如上にみた構成下に適切に配当されているというのが、文例の数の大小はあるにせよ、この「三部作」に共通する一大特色といってもよいのであるが、B書では、その文例の出典が明記されず、その文例の属する時代のみが、一世紀以前の古代、一六世紀以前の中世、一七世紀以降の近世とにに応じて、順次に、「古」「中」「近」の略号によって示されている。しかるに、A書とC書とは、一いちの文例につき、その出典が略号によって葉数や頁数まで分かるようになっていている。また、その「略号表」は、それぞれの冒頭に詳しく示されていて(A書、xxxiii—xl頁、C書、x—xvii頁)、それ自体が重要文献の列挙となっていると見て利用すべきである。文献数はA書がより多く、C書にあるものを全て含むが、ただ一つ、C書のみで用いられたものに『大日経』のチベット訳がある。また、B書はコンパクトゆえに索引は付されていないが、A書、C書には、かなり詳しい索引が付されていて(A書、五三七—五五二頁、C書、三一九—三四五頁)有益である。なお、A書のみには「序言」が付され(五—一頁)、B書、C書に先立つ「二表現位相」についての簡単な説明と、著者の一九九八年以前のチベット語文語文法に関連する諸論文の一覧とが示されているので参照されたい。

ところで、この「三部作」の紹介と直接関係のないことではあるが、読者にしてもし山口博士の「三部作」を読まれ、更に同博士のチベット語文語文法関係論文以外の諸論文を求めたいと願われた方には、山口瑞鳳監修『チベットの仏教と社会』(春秋社、一九八六年)、七三—七四五頁の「山口瑞鳳博士著作目録」を参照することをお勧めしたい。因みに、この一九八六年以降の同博士の論文目録は、私の知る限り、まとまって公けにされたものはないと思うので

第二項 存在表現を確認する助動詞

第三項 助動詞²⁰と表現位相

第四項 助動詞による時制補完表現

第五項 使役法

著者の苦心の成果をよく吟味もせずに形式の上からのみ論ずるのは失礼なことであるが、敢えて形式に拘泥させて頂くと、特に上掲の「三部作」の第七節以下についていえば、A書、C書とは異って、第七節から第十節までを並列させ、それらを順次に、「助動詞I」「助動詞II」「助動詞III」「助動詞IV」としたB書の構成が一番分りやすいもののように思われる。しかし、いずれにせよ、「助動詞」を第七節という一節内にまとめて扱ったC書のその標題に「助動詞I」とあるのは、II以下がない以上、そのIは、削除されずに残ってしまった誤りなのかもしれない。

従って、私には、B書が単に初学者向けに簡約にされただけのものとは思わないのみならず、著者御自身が断わられているように、B書には、その独自の「二表現位相構造」が内容的にも明確な意識のもとに盛り込まれている上に、形式的にもその構成が却ってつきりと示されているのである。勿論、詳細な検討のためには、文法構造的な観点からはA書を、文章構造的な観点からはC書を参照しなければならないが、私がまずB書を座右に備えるべきだと言ったのは、このように、ただ単に初学者向けだからという観点だけによっていたわけではなかったのである。

さて、これ以下には、このB書との比較において、A書とC書の特徴を手短かに紹介しておきたい。チベット語文語のあらゆる時代の文献に通曉されている山口博士によって厳選されたチベット文例

二一五

二一六

残念なのであるが、山口博士は、その博士論文の刊行である『吐蕃王国成立史研究』(岩波書店、一九八三年)を境に、仏教に関する論致もかなり多くなったように思われる。しかも、博士は、仏教学の諸問題に関しても常に斬新な問題提起をなされてきたので、ぜひともそれらを一書にまとめて頂きたいと願っているのであるが、目下のところは、その方面の論稿が比較的多く寄せられている『成田山仏教研究所紀要』第一号(一九八八年三月、ただし、この号は、特別号で『仏教思想史論集』と題されていて、山口博士の寄稿は「シヤーンタラクシタの中観」と題されている)以降の雑誌を中心に、山口博士の論文を蒐集するのが一番実際的な方法ではないかと考える。

ここで、直前に触れた山口博士の研究論文に関連して、チベット文字の転写について一言しておきたい。山口博士の論文を昔のものから順次に辿って読まれた方には容易に気づかれるであろうように、その転写方式については博士御自身が留学先のフランス(J. Bacot)式に始まって多くの方式を採用してこざるをえなかったわけであるが、恐らくは、一九八二年に「チベット仏教」の特集が組まれた『東洋学術研究』第二巻第二号で監修者として寄稿者にワイリー方式の採用を指示される前後よりは、博士御自身もこの方式に統一されたようではあるものの、この点について、「三部作」のB書では、次のように述べておられる。

本書ではチベット語のローマ字転写にはワイリー(W. Y. Wylie)方式と言われるものを用いた。わが国ではチャンドラ・ダス(S. Ch. Das)による転写方式が古くから行なわれていたが、タイプライターなどによる表記の便宜上からワイリーによる方式

が普通に用いられて久しい。少し前まではコンピュータなどによって容易にチベット文字を用いる環境がなかったので、数多くの学術的な著書、論文ではローマ字による転写が用いられたから、それらも区別して記憶しておかなければならない。本書では初めの部分でワイリー方式の転写を併記するが、第二章からはチベット文字のみを用いる。(五頁、A書、一五頁、C書、五頁もほぼ同じ。)

文字の転写方式は、法律や政治の力によって定められるべきものではないだろうし、仮りにそのようなことがあったとしても碌なことにはならないであろうが、近年自ずとワイリー方式に収斂してきただよに見えるのは、確かに便利な時代にはなったのである。しかし、「言語」を通じて、その「宗教」や「文化」や「社会」を批判的に研究する場合には、必ずしも便利で均一化しさえすればよいというわけのものではない。むしろ、かかる傾向は批判的研究に逆行する場合さえ多いかもしれない。しかも、「便利」という観点に立てば、一九四九年の中国共産党によるチベットの解放宣言、一九五九年のグライラマ一四世のインド亡命の時代を経て、近年は、世界各地に居住することになったチベット人の活躍により、チベット語の口語を介して、チベット文化を容易に知りうる、数十年前には考えられもしなかった便利な世の中には確かになったのである。だが、チベット語の口語を学ぶ教材や講習会も求め易い便利な世の中になったからとて、それが、その文化の中核をなす「仏教」のことを批判的に学ぶことの保証になるわけではない。グライラマに擦り寄って、平和や幸福などの耳に心地好い言葉と共に語られるイカガわしい本が沢山出まわっている現実も一方では確実にあるのである。我

山口瑞鳳博士のチベット語文語文法三部作(袴谷)

ことこそあれ弱まることは決してあるまいと思われる。以上で「三部作」の「紹介」を終えるが、最後に、「三部作」を通じての著者の独創的な主張である「二表現位相構造」について一言加えておきたい。この主張について、著者自身は、「三部作」中で最も執筆年月の新しい二〇〇二年九月付のC書の「はじめに」で、次のように述べておられる。

具体的なチベット語の表現形態にはまだまだ検討されるべきものが、残っていると思われるが、チベット語の言葉としての発展が表現主体位相の叙述から始まっているとする理解が許されるとすれば、著者の本書に述べた提言は、一つの体系的な理解として吟味に値するのではないかと自負している。(二三頁)

著者のこの自負に応ずる識見をもって臨んでこそ「書評」をものしたと初めて言ううるといのが私の考えである以上、それの叶わない私は「紹介」に甘んじざるをえなかったわけであるが、「位相」という用語との関係から、国語学者である菊沢季生『国語位相論』(明治書院、一九三三年)や同『国語と国民性——日本精神の闡明——』(修文館、一九四〇年)、および、田中章雄『国語学原論』(明治書院、一九七八年)や同『日本語の位相と位相差』(明治書院、一九九九年)なども若干調べてみたが、その「位相」とは、その言葉を用いる言語社会の団体による相違のことを指すようであるから、山口博士の用語とは全く関係はない。それよりはむしろ、用語上的一致はないものの、却って、時枝誠記『国語学原論』(岩波書店、一九六六年)、同『文章研究序説(時枝誠記博士著作選Ⅲ、明治書院、一九七七年)』の論究している言語の場面における主体の問題などの方が、深いところで山口博士の提言に影響を与えているの

が国とほぼ同じくらしいの記録文書の歴史をもつチベットの文化を真に理解するためには、長い歴史にわたってその文化を支え続けた「仏教」の思想を、それを記述した歴史の変遷を伴ったチベット語文語と共に知らなければならぬ。そのチベット語文語文法を明らかにしたのが、上來紹介してきた「三部作」にほかならないが、かかる意味でのチベット語の読解を当然のこととして、仏教研究の必要性に触れた山口博士の一文を次に示しておきたい。「三部作」のA書より一五年前に出た上掲の『吐蕃王国成立史研究』を「自著を語る」という欄で述べられた文の最末尾である。

筆者が本書を手がけた理由には、西欧のチベット史研究者のチベット語理解の貧しさと、独断に充ちた論説の横行ぶりを出来るだけ明らかにして誤った西欧崇拜の傾向を取り除きたいという願望もあつたが、チベット人の最初につくりあげた王国が、どれ程整備された組織の上に築かれていたかを示すことによって、チベット人に対する評価を正当なものに戻したいとの願いが遥かに強かった。

このチベット人軍事国家はやがて仏教に心酔し、価値観を革め、亡びゆくインド仏教を国をあげて継承し、剩り発展させた。チベットへの評価を改める人々のうちから必ず、この国の仏教研究を志す人達が更に数多く現れ、仏教研究の大勢を形づくる日がくるに違いない。(『東西交渉』通巻六号、一九八三年夏の号(第二卷第二号)、四〇頁)

思えば、それからちょうど二十年ということになるわけであるがこの「三部作」によってチベット語文語を学び、更に仏教研究を志さんとする人に対する、右のような山口博士の願いは、益々強まる

二一七

山口瑞鳳博士のチベット語文語文法三部作(袴谷)

二一八

かもしれない。しかし、かかる方面を論ずることは、いかに時間をかけたにせよ、私の力には余ることと言わなければならない。ただ現在の私に言えることは、仮りに山口博士がチベット語と日本語との親近性に言及することがあつたとしても、それを生齧りして牽強附会な説に仕立て上ることがあつてはならないということだけである。戦前に国語学が皇国史観に迎合していた頃、敬語法は我が「国体」と密接に繋がった国語特有のものとする説も横行した。しかし、この山口博士の「三部作」によってチベット語文語における敬語法を学ぶなら、却って敬語法なるものが日本語だけに特有なものではないことを学ぶことができるであろう。ゲートではないが、外国語を知らない者は自国語も知らないのである。

(二〇〇三年六月二十六日)

〔A書、A5版、本文、五三五頁、「扉」「はじめに」「目次」略号表、×三頁、「索引」、一六頁、一九九八年四月二十日第一刷発行、東京、春秋社、定価税別、一、二、〇〇〇円、B書、A5版、本文、二五五頁、「はじめに」「目次」「序論」、×××頁、二〇〇二年二月八日第一刷発行、東京、春秋社、定価税別、二、九〇〇円、C書、B5版、本文、三二七頁、「扉」「はじめに」「略号表」「目次」、×××頁、「索引」、二七頁、二〇〇三年一月二十八日第一刷発行、成田、大本山成田山新勝寺成田山仏教研究所、定価税別、一〇、〇〇〇円〕